慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米軍基地文化の形成と展開： 1970年代の東京都福生市とその周辺地域を事例として
Sub Title	Cultural relations between Fussa city and Yokota Air Force Base in the 1970s
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shūichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2019
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.88 (2019.) ,p.19- 35
JaLC DOI	
Abstract	The study examines cultural relations between Fussa City and the Yokota Air Force Base. Establishing a U.S. military base has cultural implications for the local communities in which the base is located. The Yokota Air Force Base was built in 1945 and located in Fussa City, Tokyo. As a result, the local and cultural groups were influenced by the Yokota Base. The study examines these groups and their cultural activities, drawing on various resources, such as magazine articles, newspapers, and local materials. Result reveals that community members participated in free cultural activities and formed self-contained groups due to their distance from local communities and because of the local economy in Fussa. Moreover, cultural activities and Japanese beliefs were consciously and unconsciously influenced by American soldiers and the military base during the 1970s.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000088-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米軍基地文化の形成と展開

――1970年代の東京都福生市とその周辺地域を事例として――

Cultural Relations Between Fussa City and Yokota Air Force Base in the 1970s

塚　田　修　一*
Shuichi Tsukada

The study examines cultural relations between Fussa City and the Yokota Air Force Base. Establishing a U.S. military base has cultural implications for the local communities in which the base is located. The Yokota Air Force Base was built in 1945 and located in Fussa City, Tokyo. As a result, the local and cultural groups were influenced by the Yokota Base. The study examines these groups and their cultural activities, drawing on various resources, such as magazine articles, newspapers, and local materials. Result reveals that community members participated in free cultural activities and formed self-contained groups due to their distance from local communities and because of the local economy in Fussa. Moreover, cultural activities and Japanese beliefs were consciously and unconsciously influenced by American soldiers and the military base during the 1970s.
Key words: U.S. military base, local community, local economy, cultural groups, Fussa City
キーワード：在日米軍基地，地域社会，地域経済，文化集団，福生市

1．問題の所在と先行研究の整理

1）問題の所在

本稿の目的は，在日米軍横田基地が所在する東京都福生市とその周辺地域をフィールドとして，米軍基地文化の形成と展開の様相，およびその社会条件を考察するものである。本稿同様に米軍基地文化についての研究書を編んだ難波功士は，「米軍基地文化」という視座について，「米軍（基地）と結縁なものたち」を文化的側面からとらえ直す試みであると述べているものの，「米軍基地文化」に明確な定義を与えてはいない（難波2014: 1）。本稿においては，難波の視座自体は引き継ぎつつ，「米軍基地文化」について，在日米軍基地周辺において，在日米軍と地域社会との文化的接触によって醸成された，日本

* 相模女子大学学芸学部講師

人を主体とする文化および文化的営みのこと，という定義を与えておく。

在日米空軍横田基地が所在する東京都福生市およびその周辺地域において米軍基地文化が形成され，展開したのは1960年代終わりから1970年代前半にかけてのことである。福生においてそれは「米軍ハウス文化」として展開することになる。「米軍ハウス」とは，在日米軍が戦後，基地周辺の市町や日本人に呼びかけて米軍基地の敷地外に造らせた，米軍人とその家族が居住する一戸建て貸家のことである（荒居2002: 89–90; 新井2005: 774）。後述するように，1970年前後にこの米軍ハウスに日本人の若者たちが住み，独自の文化が展開していく。この福生の米軍ハウス文化は，米軍ハウスにおける無軌道な若者たちを描いた村上龍の小説『限りなく透明に近いブルー』（村上1976）によって広く知られており，またミュージシャンの大瀧詠一も福生（正確には福生市と隣接する瑞穂町）の米軍ハウスを活動の拠点としていたことも有名である。

この福生において形成され，展開した米軍ハウス文化は，他の地域における米軍基地文化とは幾つかの点で性格を異にしている。すなわち，(1) 横須賀や横浜で見られるような，米軍基地や米軍キャンプへの慰問といった，米軍や米兵との直接的接触を通して形成されたものではなく，「米軍ハウス」という住まいを拠点として形成・展開されたものであるということ。また，(2) その形成と展開がほぼ1970年代に限定されるということ。後述するように，福生とそうした米軍基地文化との結びつきは，必ずしも敗戦と占領直後から自明のものであったわけではなく，敗戦後の福生では，文化というよりはむしろ，米軍基地の町となったことによる風紀の乱れが問題となっていた。

このように米軍基地文化の中でも特徴的な性格を有する福生の米軍ハウス文化を理解するため，本稿では，福生においてそれがどのように形成され，またどのように展開し，そしてそれがどのような社会条件によって可能になっていたのかを考察していく。

2）先行研究の整理と本稿の位置付け

本稿に関連する先行研究を整理しておこう。在日米軍基地に関しては，その是非や反対運動の歴史に関する研究，また，いわゆる「基地問題」に焦点を当てた研究が蓄積されており（林2014; Vine 2015＝2016など），文化という視点から考察する研究は少ないが，難波功士らによって，米軍基地文化に関するまとまった研究書が上梓されている（難波編2014）。当書には全国各地に所在する在日米軍基地と文化に関する諸論考が収められているが，それぞれの米軍基地文化の社会背景や社会条件に関しては十分に記述が及んでいるとは言い難い。

また，米軍基地や米軍キャンプへの慰問といった，米兵との直接的接触を通して形成された米軍基地文化に関しては，東谷護（東谷2005）および青木深（青木2013）による研究がある。東谷は，占領期の進駐軍との音楽的接触が，戦後の歌謡曲および芸能界システムの基盤となっていったことを説得的に論じ，また青木は進駐軍との文化的接触の様相の詳細を明らかにしている。しかし，先述のように，本稿が扱う福生の米軍ハウス文化は，それらの研究で扱われる米軍基地文化とは異なる性格を有しているのである。

さらに，本稿の考察の対象である福生と米軍基地文化に関する研究としては，新井智一による労作がある。新井は福生市と横田基地との関係がどのように形成されたのか，すなわち福生市の「場所の政治」を，福生市の横田基地をめぐる政治・経済・文化的過程を詳細に検討することによって鮮やかに描き出している（新井2005）。本稿はこの新井の研究に多くを負っている。新井の研究の最も興味深いと

ころは，1980年代以降の福生における，行政や商店街による，横田基地に関するイメージ戦略を詳らかにした点である。また木本玲一は，新井の研究に拠りながらも，福生の米軍ハウス文化について，米軍基地を介したグローバル化／ローカル化の様相として記述している（木本2011）。しかしながら，新井の研究は，米軍ハウス文化が形成された社会背景を積極的に問うておらず，また木本の研究は，米軍ハウス文化の特徴やそれを可能にした社会条件を積極的に考察していない。本稿は，これら先行研究の欠を埋めるものである。

そして本稿は，戦後日本における対米意識およびそれに関連する文化的諸実践を，米軍基地が所在する街である福生という地域社会をフィールドとして描出する社会学的考察として位置づけることができる。吉見俊哉は，様々な文化表象に注目することで，戦後日本という場において，「アメリカ」がどのように人びとの政治的無意識に介入する特別の審級として作動していったのかを明らかにしている（吉見2007）。吉見は，1950年代には，立川や福生という基地の街において「暴力」として人びとの日常に侵入し，それゆえ反基地闘争の標的となる基地としての「アメリカ」が前景化されていたが，70年代半ば以降，「親米」と「反米」という対抗自体が人びとの意識に浮上しなくなっていく時代，つまり「反米」という立場自体がリアリティを持たなくなる時代がやってくることを指摘する。そして先述の新井の研究にも依拠しつつ，1980年代末の日本では「基地の街」そのものが，消費可能なイメージとして広く商品化されたことを論じている（吉見2007）。このように吉見の考察は，本稿同様に「基地の街」に言及しつつも，戦後日本における対米意識が，「反米」から「親米」へ転轍する様相をマクロな水準で描出するものである。さらに，吉見の論を引き継いだ森正人は，文化地理学の視点から，敗戦から1970年頃までの日本社会において，アメリカ的な神話を体現する様々な商品がどのように受容されてきたのかを探求している（森2018）。いわば森は，戦後日本の対米意識について，日常生活の水準で考察をおこなっている。

本稿はどちらの研究とも異なる，米軍基地の街である福生という地域社会をフィールドとした，いわばローカルな水準において，対米意識に関わる文化的諸実践を記述するものである。こうした本稿の作業は，戦後日本社会における日米の文化的関係に関する社会学的理解に資するものである。

本稿では，言説資料に拠りつつ，分析を行う。言説資料の収集は，国立国会図書館サーチのほか，雑誌記事については大宅壮一文庫雑誌記事索引検索によって行い，また新聞記事については「聞蔵Ⅱビジュアル」，「ヨミダス歴史館」および「毎索」によって行った。さらに地域に関する資料に関しては，福生市立中央図書館においても収集を行った。

以下，本稿ではまず，戦前から終戦までの福生の様子を素描し（2章），米軍ハウス文化がいかにしてこの福生において形成されたかを記述し（3, 4章），米軍ハウス文化が展開する様相を記述し（5章），それがいかなる社会条件のもとで可能になっていたのかを考察する（6章）。

2.　福生の戦前

本稿の対象となる福生について基礎的な情報を確認しておこう。1940年に福生村，熊川村が合併して福生町となり，1970年に地方自治法の一部改正により福生市となっている（福生市史編さん委員会1994）。福生市は武蔵野台地の西端に位置し，東は立川市・昭島市・武蔵村山市，西は多摩川を隔ててあきる野市，南は八王子市，北は羽村市・瑞穂町に接している[1)]。そして市の東北部には，市の行政面積の約3分の1を占める米空軍横田基地が所在している（福生市企画財政部企画調整課2016）。

次に，戦前から終戦までの福生の状況を素描しよう。戦前の福生は農業および養蚕・製糸業が地域経済の中心であった。1937年のデータによれば，福生村・熊川村の全戸数1056戸のうち，農業戸数が481戸であった。また，土地利用の内訳は，宅地以外の土地のうち，畑が58.4パーセント，田が4.4パーセント，雑地37.2パーセントであり，圧倒的な畑作地帯であった（福生市史編さん委員会1994: 557–558）。

その福生に変化をもたらしたのが，陸軍による多摩飛行場の建造である。軍部は1939年に福生・熊川両村の約2000ヘクタールの土地を買収し，1940年に陸軍多摩飛行場を建設する。それによって，立川・福生の両飛行場を有する青梅線沿線には，各種の軍事施設，工場が集まり，軍人やそれらの工場の関係者が福生町にも移住するようになってくる。ただし，ここで買収された土地はほとんどが山林であったところであり，畑が広がり養蚕業が盛んである様子は終戦まで続いていた（福生市史編さん委員会1994: 563–565）。実際，終戦直後の福生の様子を，ある住民は次のように述懐している。

> 太平洋戦争が終った頃の福生市は，まだ農業が盛んに行われていました。集落も熊川の南から加美の羽村境までの奥多摩街道沿いが大部分で，青梅線の北側には原ケ谷戸部落があるだけでした。また商店街は，福生駅前と銀座通りのごく一部に町らしさをかたちづくっていました。こんな具合で，市のほとんどは畑とたんぼでした。今では想像もつかないことですが，福生駅と牛浜駅の間は畑が続き，青梅線と国道十六号線（基地前の国道で昔は日光街道と呼んでいた）の間も，人家はほとんどなく畑でした。今，公団住宅が建ったり区画整備された多摩川沿いは，全部たんぼで約四十ヘクタールほどありました（山崎編1977: 60–61）。

このように，終戦までの福生は，陸軍多摩飛行場を有しながらも，農業をその経済の中心とする地域であった。

3.　福生の構造転換

1）農業経営の不振

1945年の敗戦に伴い，陸軍多摩飛行場はそのまま米空軍横田基地として使用されることになる。つまり，福生においては旧日本軍の軍用地が，戦後に産業や工業に転用されることがなかったということである[2)]。この米空軍横田基地としての使用は，福生の地域経済に大きな変化をもたらすことになる。

経済的打撃を被ったのは先述の農業である。福生町と隣接する瑞穂町について，臼井吉見は次のようなルポルタージュを書いている。

> 「まったく，なさけなくって，オレあ，もうなにもいう気になれないネ。なんしろ，このとおりだからネ」麦を刈っていた農夫の顔は，土ぼこりで塗りこめられて，目ばかり光っている。指さして見せた，足もとの麦は，ヒザほどもなく，これも土ぼこりにまみれている。麦の間のサツマイモにしても，緑の色どころか，葉っぱの形さえさだかではない。なにもかも，見えるかぎりのものが土ぼこりで埋められているのだ。（中略）ときどき，ジェット機が，三機五機と帰ってくる。こいつが，麦刈りの農夫の頭をかすめるばかりに，ばかばかしいほど，けたたましい音響のかたまりをぶっつけて過ぎる。そのたびに，目前の貧弱な麦の穂が吹きとばされていく（臼井吉見「横田基地界隈　追いつめられた瑞穂，砂川町」『週刊朝日』1955年7月17日：32–33）。

実際，資料の残る1950年以降の福生町の産業別人口構成を見てみると，1950年度には全体の約15パーセントを占めていた農業人口が，1955年度には約10パーセントに，1960年度には約5パーセントに減少している（福生市史編さん委員会1994: 571–572）。

2）オフ・リミッツと町の浄化運動

こうした農家の減少に反して，同時期に高い割合を示しているのがサービス業人口であり，1950年度には約22パーセント，1955年度には約35パーセント，1960年度には約32パーセントを占めている（福生市史編さん委員会1994: 572）。これは米軍人相手の飲食，サービス業の数が多いためであり，当時の福生の地域経済が米軍基地に強く依存していたことを示している。

事実，1950年に朝鮮戦争が起こると，米軍人相手の女性が全国各地から福生に集まり，彼女たちに部屋を提供する「置屋」と称する貸家が建てられた[3)]。こうして「町の風俗は一変し，けばけばしい派手な装いの彼女たちが町中に氾濫して」くる（福生市史編さん委員会1994: 473）。

そうした風紀の乱れに対し，米軍横田基地司令官は1952年9月に福生地区一帯への米軍人の立ち入り禁止令（オフ・リミッツ）を出した。その結果，米軍人で繁栄していた商店街は大打撃を受けることになる。そこで福生町は，警察，議会，その他各種団体と協議を重ね，対策として，福生駅の東側の一部にホテルおよび飲食店などの繁華街（「赤線区域」）を設け，この地区以外の置屋に類するものはすべて徹底的に取り締まることを決め，町ぐるみで浄化運動を展開する。その結果，10月に立ち入り禁止令は一応解除されたが，その後も短期間の立ち入り禁止令が度々発令された（福生市史編さん委員会1994: 475–477）。

そのため，福生町は1953年11月に都下で初めての「風紀取締条例」を制定し，各種団体と共に町の浄化対策に当たった（福生市史編さん委員会1994: 477）。こうした福生町の浄化運動を取材した『週刊読売』の記事では，「これによって米軍司令部のごきげんがなおり，立入禁止が解除になれば，いままで町に落ちていた月に約三千万円の金が復活し，経済的に豊かになる」という「町の首脳部某氏」の語りが引用されている（「風壊行為禁止の町」『週刊読売』1953年11月29日：15）。さらに，『サンデー毎日』の記事は，「風紀のよくなったはずのフッサ，日本最初の町条例を施行したフッサも，米軍の宣言一つで，また元の杢阿弥に帰るのではなかろうか――これは町内の有識者たちの懸念である。」（「〝浄化基地〟フッサ町」『サンデー毎日』1954年2月7日：30）と書き，米軍のオフ・リミッツによって翻弄される福生の状況を伝えている。

3）米軍ハウス経営

ここまで見てきた農業経営の不振，および米軍のオフ・リミッツと町の浄化対策から生まれたのが，米軍ハウス経営である。米軍の内部資料を分析した小澤智子によれば，1952年には，横田基地と立川基地に所属する将兵で基地内に居住する資格を有する入居希望者数と住居戸数との比率を計算すると，この二か所の基地の住居供給率はそれぞれ約40%にとどまり，横田基地内で入居するための待ち時間は約一年になることが報告されていた（小澤2015: 182）。こうした基地内の深刻な住宅不足を解消するために，1952年11月に米空軍横田基地は基地外で本格的に米軍ハウスを確保することに乗り出し，福生町の複数の地主や家主を対象に，至急，賃貸物件を提供するようにと要請していた（小澤2015: 182）。このような米軍側の高い需要を背景として，先述のオフ・リミッツと町の浄化政策の結果，経済

的打撃を被った業者が「置屋」をハウスへと転用するようになった。それは当時のステイバーズ横田基地司令官自らが，次のように推奨していた。

> アメリカの軍人が日本婦人（街娼婦）を抱いて街を歩いている姿は決して日米親善の為めにはマイナスになっても，プラスにはなっていない。今ベースには五百戸のハウスがあるがその半分は立川基地で使っているので二〇〇戸程不足している，従来の置家だった家の内部を少し改造しさへすれば，米軍関係の家族用の住居にもなるし，又日本人使用人の家族用，或は家としてどしどし貸してほしい。そうして町が浄化されればベース内の五百戸の家族も町に買い物に出るだろうそれ等は皆福生町としては街娼婦に換る新しい購買力になるのである。街娼婦のみが購買力だとしている考へ方を切り換へて，新しい購買力を求めそして正しい繁栄と発展をするやうにすべきだと思ふ（『福生新聞』1952年10月15日：1）。

さらに，先に見た農業経営不振から，農地を宅地に転用し，米軍ハウスを建築して1棟2万から3万円程度の家賃収入へと転向するものが急激に増大した（福生町誌編集委員会1960: 251）。福生・羽村・瑞穂地域で東京都農業改良普及委員を務めたある人物は，当時の福生の農家をこのように回想している。

> この頃の福生の農業で，とくに記しておきたいことがあります。それは戦後米軍が横田基地に入り，福生は文字通り基地の町となったことです。これが農業にも少なからず影響がありました。それは，米軍人やその家族の住む家が建てられたことです。畑をつぶし，そこにハウスと称する米人向けの貸家を建てますと，日本人の貸家よりはるかに高い家賃収入があったわけです。そのためたくさんの農家がこのハウスを持つようになりました。そして畑も大分つぶれたわけです（山崎編1977: 62）。

実際に，1959年・61年・63年の福生町の「町会別農地転用（他人譲渡）状況」（表1）と，1965年時点の福生町内の「外国人ハウスの状況」（表2）を照合してみると，農地が米軍ハウスへと転用された状況が確認できる。

これらの米軍ハウスは1954年から建てられ始め，1957・58年をピークとして，年間200戸ないし300戸くらいずつ建てられており，1960年8月には福生町内に1700戸存在していた（福生町誌編集委員会1960: 251）。なお，1954年1月には早くも米軍ハウス業者がお互いに連絡して「サービスの改善，防犯，家賃の適正化，米軍人の要望周知方等をすることを目的として」，米軍家族住宅協力会が結成されている（『福生新聞』1954年2月15日）。

このように，米軍のオフ・リミッツと町の浄化対策による業者の転業，および農業経営の不振による農地の転用という，福生の地域社会-経済状況を背景として，いわば構造的に発生したのが，米軍ハウス建築のブームであった。

4.　基地依存型経済の綻び

1）造りすぎた米軍ハウス

この米軍ハウス建築ブームによって，福生では米軍ハウスの供給過多が生じる。1958年には，『福生

表1　町会別農地転用（他人譲渡）状況[*1,*2]

町会名	1959年	1961年	1963年[*3]
南	0.1	11.3	7.9
団地	—	—	—
内出	17.0	11.5	18.3
武蔵野	183.5	51.0	41.8
富士見台	—	12.4	—
鍋ヶ谷戸1	62.5	50.7	19.7
鍋ヶ谷戸2	35.3	15.4	8.3
熊牛	53.9	35.9	15.7
牛浜1	—	8.3	—
牛浜2	65.4	19.3	37.0
原ヶ谷戸	114.6	9.2	26.8
志茂1	—	13.7	7.7
志茂2	4.1	—	—
永田	3.1	9.6	15.8
長沢1	2.1	—	16.3
長沢2	1.3	2.1	3.3
加美1	1.1	5.4	4.0
加美2	19.6	47.3	10.4
本町1	—	—	—
本町2	—	—	—
本町3	—	—	—
中央	—	—	—
本町6	18.9	5.1	8.2
本町7	143.8	29.7	17.9
本町8	110.6	57.3	56.7

*1 福生市史編さん委員会（1993）：209より作成
*2 単位＝a
*3 5/25～8/8の資料が欠失

表2　福生町内外国人ハウスの状況[*1,*2]

町会名	ハウス数
南	0
団地	0
内出	29
武蔵野	40
富士見台	101
鍋ヶ谷戸1	18
鍋ヶ谷戸2	50
熊牛	138
牛浜1	34
牛浜2	45
原ヶ谷戸	360
志茂1	8
志茂2	57
永田	3
長沢1	12
長沢2	0
加美1	0
加美2	9
本町1	5
本町2	4
本町3	0
中央	0
本町6	1
本町7	356
本町8	253
合計	1523

*1 1965年1月1日現在
*2 福生町（1965）：66より作成

新聞』紙上に，「ハウスの建築は既に飽和状態」として，「横田基地周辺に建設されている米軍人家族用ハウスは昭和27年10月本紙上に，ステイバーズ横田基地司令官談として『米軍人関係家族用ハウスが二〇〇戸必要だから建築して貸して欲しい』という記事を掲載されて以来ハウスの建築はその後基地周辺に約一千戸以上建設されるに至った。ところが最近都心部にあった軍直営のハイツを撤去し，目下基地内に建築しつつある状況からしても既に（ママ）日本人の建築するハウスは既に飽和状態となってしまったのでハウス協会でも，これ以上のハウス建設は採算上からも危険であるということ……の注意を喚起するに至った」（『福生新聞』1958年11月15日号：1）との記事が掲載されている。

さらに，アイゼンハワーによる「米軍家族引き揚げ」の声明が出されると，福生の米軍ハウス業者は不安にさいなまれる。1960年の雑誌記事には，「この春あたりから建てすぎて，百五十戸ぐらいもあいていたところへ引き揚げときたんだからたまりません。アメリカさんは賢いね。近ごろじゃ坪数や設備なんかより，安いハウスを探し歩く。そしてはいったらアラさがしをして値切るんだネ……。だいたい基地の司令官の要請で建てたんだから責任をとってくれなくちゃ」（「いらなくなるか，基地外ハウス」

『週刊朝日』1960年12月18日：25）という福生のハウス業者の嘆きが掲載されている。

2）空き家となった米軍ハウス

ベトナム戦争の終結に伴う在日米軍施設の再編により，横田基地の在留米軍人員は減少する（新井2005）。また1969年には横田基地の近隣に所在する立川基地から米軍飛行部隊が撤退している。このため，立川から福生にかけての米軍ハウスには多くの空き家が発生することになる。1971年の新聞記事は，空き家となり「お化け屋敷」と化した米軍ハウス群の様子と，それらを貸すか，売却するか，思惑をめぐらすハウス業者の声を伝えている。ある業者は，「基地が縮小の方向へ進んでいる現実と，横田基地がそう急になくなるわけは……という一種の願望もないまざって，いわば宙づりの状態です。その中でハウスだけが朽ちていく」（『朝日新聞（東京版）』1971年2月10日：24）と語っている。

この空き家となった米軍ハウス群に入居したのが日本人，特に若者たちであった。福生の米軍ハウス業者を取材した1974年の雑誌記事は，「ここは米人相手の事務所だというのに，日本人の家探し客がちょくちょく飛び込んでくる。それも判でおしたように長髪の青年である。電話での申し込みもかなり多いが，これもたいていは若い客らしい」（「長髪族にもてる米軍ハウス」『朝日ジャーナル』1974年5月24日：36）と報告している。また米軍ハウスのオーナーを経験し，ハウス管理事務所に勤めるある人物は，米兵が部隊替えで空き家になった際に，「学生なら2, 3年で出ていくだろう」と，短期間のつなぎのつもりで入居させたのが日本人の住むはじまりであったと語っている（荒居2002: 93）。先述の雑誌記事は，この時期の福生の米軍ハウスの状況をこう伝えている。

> 横田基地では米兵の数がかなり減った。当然，ハウスにも空家が続出する。業者にとっては一大ピンチのはずだった。ところが，動揺の色はさっぱり見られなかった。それどころか，「このさい，アメリカさんとはすっぱり手を切る」という業者もふえている。家主たちが平然としているのは，日本人の客が急速にふえているからである。米人家族の立ち去った空家はすぐ日本人でふさがり，米軍ハウスはどんどんニッポンナイズされてゆく。大手ハウス業者の一人は「今一〇〇〇戸あるハウスのうち，米人が住んでいるのは三割に過ぎませんよ」という（「長髪族にもてる米軍ハウス」『朝日ジャーナル』1974年5月24日：37）。

この70年代の米軍ハウスの新たな住人たちによって，ここに独自の文化が形成されていくのである。すなわち，福生における米軍ハウス経営が，もはや米軍基地や米兵を相手としては立ち行かなくなったことによって誕生したのが，この米軍ハウス文化であった。

5.　米軍ハウス文化の展開

1）自由な文化的営為

本章では，1970年代の福生における米軍ハウス文化の特徴を整理していく。まず指摘できるのは，米軍ハウスにおいて，住民による自由な文化的営為が可能であったことである。実際，ノンフィクションライターの三山喬の取材に対し，横田基地前で米国保険代理店を営む女性は，1970年代の米軍ハウスの住民たちについて，「ヒッピーなんて言うと失礼だけど，デザイナーとか音楽家とか，そういう人。家があるのに庭のテントで寝泊まりする人もいて，とにかく奇想天外，気ままな人ばかりでした」と述

懐している（三山喬「福生――『七〇年代の青春』を辿る」『文藝春秋』2018年12月号：345）。こうした状況は，1970年代の雑誌記事で確認することができる。「米軍が引きあげた後の空家をアジトとしたのが福生ヴィレッジ。東京から1時間半で行けるここには，ヤングが求めているほんものの自由と，ナウな感覚を大切にするムードがある」（「若者のニューアジト福生」『週刊プレイボーイ』1973年7月17日号：49）と称揚されており，また「横田基地JAPAMER HOUSE 333号室」（『週刊プレイボーイ』1972年5月2日号）には，福生の米軍ハウスで，男女6人がコミューンをつくり，裸で生活を送る様子が取り上げられている。さらに，「ベストセラー『限りなく透明に近いブルー』の実践者たち」（『ヤングレディ』1976年9月14日号）には，米軍ハウスでマリファナを吸い，乱行パーティーに耽る若者たちが紹介されている。

米軍ハウスで自由な文化的営為を謳歌したのは，それら無軌道な若者たちだけではない。ミュージシャンの大瀧詠一は，1973年に福生（正確には瑞穂町）の米軍ハウスに移り住み，そこに自身の音楽スタジオ「福生45スタジオ」を作り上げる。大瀧のもとで修行を積んだ音楽評論家の湯浅学は，この「福生45スタジオ」の様子について次のように述懐している。「米軍ハウスを三棟使っていました。一つは母屋，一つはスタジオ，そのスタジオの隣がミュージシャンの控室兼宿泊所。スタジオでレコーディングがある時は，泊まりがけのミュージシャンもいるので，その人達とよく喋ってました。大瀧さんもスタジオで作業が終わるとそのミュージシャン溜まりの方に来て，夜中ずっと喋って，朝に寝るみたいなことが，よくありました。楽しい夜更しでした」（『映画芸術』2014年春号第447号：62）。このように，大瀧は自由な音楽活動が可能な空間をこの福生の米軍ハウスで創り上げたのである[4)]。

2）自足的な生活と住民同士のつながり

次にこの米軍ハウス文化の特徴として指摘できるのは，米軍ハウスの住民たちが，自足的な生活を送っていたことである。例えば，1970年代半ばに福生の米軍ハウスで仲間と共同生活を始めたミュージシャンの忌野清志郎は，「何でも手に入った」福生に籠る生活を送っている。

> 福生へ引越そうって誰が最初に言い出したんだっけな。あの時代は福生とかの米軍ハウスへ移り住むってちょっと流行だった。安いしさ，それに広いからね。ケンチと日隅の三人で一軒家借りたよ。ジャパマ・ハイツ。横田基地のまわりにそんな家がいっぱい建ってた。
>
> （中略）横田基地の周辺には変な店がいっぱいあるんだよ。古道具屋とか，放出品の店なんか。もうガラクタだよね，壺や家具なんか使いものにならねぇようなもんが，ゴロゴロ店の中にほこりかぶってならんでんだから。
>
> （中略）オレたちはそんなガラクタを買ってきて，部屋の中をグチャグチャに汚してた。もう，とんでもねえ生活だよ。『シングル・マン』の中ジャケットで異様な格好した三人の写真があるだろ？あのままの暮らし。わけわかんねぇのが出入りするしさ。あの頃の福生は何でも手に入ったよ。オレはいつも目を充血さしてぼーっとしてた。福生は都心からずいぶん離れてるからね，億劫なんだ。あんまり出たくなくなっちゃうの。だから渋谷まで練習出るのが大変でさ。雪なんか降ったらそれこそどこにも行く気しねぇよ。（連野1989: 151–153）

つまり，当時の福生の米軍ハウスにおいては，福生から出ない暮らしが可能だったのである。また，

福生の米軍ハウスの住民たちは，互いに過度には干渉しないながらも，自足的で，ゆるやかなつながりを有していた。60年代終わりに福生の米軍ハウスに住み始めたある人物は，こう述べている。

> 米軍ハウスというのは，バラバラな〈点〉なんだけれど，上から見たら〈線〉でくっついて，つながりがある。『何か仕事ないか？』って言ったら，誰かが教えてくれるし，探せば仕事はいっぱいある。俺はグリコの仕事や生協準備委員会やちり紙交換をして稼いだ。そういうことをしながら生き残った人もいるし，ダメになった人もいっぱいいる（「米軍ハウスが熱かった日々」『dankaiパンチ』2008年8月）。

福生に隣接する立川の米軍ハウスに住み，そこでアパレルのデザイン事務所を立ち上げたある人物に取材した雑誌記事では，米軍ハウスの住民たちの仲間意識が語られている。

> 家の中には居候のようにつねに誰かがいて，仲間たちが住むのも皆，近くの米軍ハウスだ。『同好の士というか，一種のビッグ・ファミリーですね。ダンス・パーティーなんかも頻繁だった』『ラブ＆ピースでした。仕事終わるとみんなで飯を食べて，酒を呑んで』（中略）米軍ハウスのある福生，立川，横須賀は国道16号線でつながっていて，国分寺あたりまで，ちょっとヒッピー風なコミュニティーが広かっていたという。『街で似たような風体を見かければ，お互い仲間意識があった。僕もそうだけど，みんな長髪だしね。ピースな人が多かったね』」（「米軍ハウスが熱かった日々」『dankaiパンチ』2008年8月）。

同様に，立川の旧米軍ハウス住民を取材した雑誌記事からも，その仲間意識を読み取ることができる。

> 何人かの若者たちが共同で一軒を借りる形が何軒かある　男のコばかり　女のコばかり　そして数組のカップルが赤ん坊と――こういった〝共同生活体ふう〟もあり　すでに子供を持った若者夫婦の〝家庭ふう〟もあり　長髪族の住いの形はさまざまだが　砂川から福生（ふっさ＝横田基地周辺）にかけて「ぼくらの仲間　百五十人くらいいるんじゃないか？」（「〝長髪ヒッピー〟に占拠された立川・旧米軍ハウス」『週刊新潮』1973年3月22日号）。

こうした米軍ハウスの住民たちのつながりを示すのが，住民たちの間で使用されていた「フリーク・ネーム」の存在である。フリーク・ネームとは，自分の本名と異なる名前を仲間や所属の団体間で使用するものであり，福生のハウス住民の間では，普通の日常生活の中でのやり取りとして使われていた（荒居2002: 157–158）。その様子を，雑誌記事は，「そのほか福生ヴィレッジの住民を身元調査してみると……イベント屋のサバト，ミニコミを出している社長，ロック・ジャズ評論家ヒゲ，16ミリの前衛映画をとってるヤマチ，美容学校中退のアツシ，グラムロックバンド〝ルージュ〟のメンバーなどで，みんなアダ名で呼び合う。」（「若者のニューアジト福生」『週刊プレイボーイ』1973年7月17日号：49，傍点原文ママ）と伝えている。

3）フィクションとしてのアメリカ

さらに福生の米軍ハウス文化の特徴として指摘できるのは，ハウスの住民たちにとっての「アメリカ」が必ずしも強い憧憬の対象ではないということである。「ハウスのいいところは音楽演奏をやったりペットを飼うのに最適。しだいに老朽化してからは家賃が安いのもメリットだった」（荒居2002: 97）と指摘されているように，住民たちが米軍ハウスに移り住んだ動機は，必ずしもアメリカへの強い憧憬に基づくわけではなく，「自由に楽器が演奏できること」や「家賃が安いこと」であった。また，先に参照した忌野は，米軍ハウスへ移り住むことが「ちょっと流行だった」と述べているし，さらに大瀧詠一も，自らが暮らす福生の良さを，必ずしもフェンスの向こうの「アメリカ」に見出してはいない。「福生の良さ？そりゃ住んでいる仲間たちが素晴らしいということだね。ここには，朝八時半から夕方の五時まで働くような，スクウエアな人種はいないんだ。みんな金はないけど，ミュージシャンになろうとか，そういう目的をちゃんと持ってる。つまり，みんなビビッドに生きているのさ。それが素晴らしいんだヨ」（「FUSSA＝若き芸術家たちの限りなく透明なブルーの世界」『女性自身』1976年7月29日：51）。

大瀧に誘われて福生で生活を始めたミュージシャンの伊藤銀次にとっても，米軍ハウス暮らしは，「ロック的生き方」を実践するための手段の一つであった。伊藤は次のように述べている。「生き方と音楽がダブって見えた時代だったんだよ。ロック的生き方っていうのがあって，それは家庭の中ではできないっていうのがあったんだよね。家庭から1回外れて，つまりハウスみたいなところに住んだりとか，髪を伸ばしたりとか，ドロップ・アウトしないと味わえないっていう……。」（伊藤1992: 30）。

イラストレーターの天野喜孝は，1970年代に福生にあふれる異国情緒に惹かれて，米軍ハウスに移り住んだ一人である。「まちには米軍が放出したヴィンテージ家具のショップがあったりと，異国情緒にあふれていました。ブッラクライトを当てると光るロックバンドのポスターなどを売っているショップもあって，好きでしたね。七〇年代といえば，アメリカのポップアートやロック，サイケデリックなカルチャーが日本にどんどん入ってきていた時代。福生界隈は米軍基地の近くだったこともあり，特に情報量も多かったと思います」（「アメリカンポップアートの洗礼。」『東京人』No. 410, 2019年5月号：92）。だが，天野は，「私はといえば，アメコミやピーター・マックス，それにアンディ・ウォーホールが大好きでしたので，アメリカのポップアートの影響をもろに受け，ジャケットなどにも色濃く反映したものを描くようになりました。同時に，そうした異文化に触れるたびに，『自分ももっとこうした絵を描いてみたい』という思いもどんどん強くなっていきましたね」（「アメリカンポップアートの洗礼。」『東京人』No. 410, 2019年5月号：92）と述べるように，あくまで，アメリカのポップアートという，記号化されたアメリカの情報を希求していたのである。

6.　米軍ハウス文化を可能にした社会条件

1）地域社会との分断

前章では，1970年代の福生における米軍ハウス文化の特徴を整理してきた。ここで問われなければならないのは，そうした米軍ハウス文化の形成がなぜ可能であったのか，すなわち米軍ハウス文化形成の社会条件である。

本稿はその条件をまず米軍ハウス（の住民たち）と地域社会との間の分断に見出す。その手がかりになるのが，実際に米軍ハウスで生活し，ハウス生活者たちを撮影した写真家の坂野正人の述懐である。坂野は，福生駅周辺から見ると高台となっている横田基地に沿って点在する米軍ハウスに住まう若者た

ちが，地元住民からは「丘の上」と呼ばれて，無視あるいは蔑視されおり，「とにかく干渉される事がほとんどなく，ハウスに住んでいるというだけで，福生市の市民という意識はまるでなかった」（坂野1980）と述べている。実際，この地域社会との分断ゆえに，米軍ハウスおよびその住民は，しばしば地域社会から否定的にとらえられていた（新井2005; 木本2011）。新井智一によれば，福生の米軍ハウスにおける無軌道な若者たちを描いた村上龍の小説『限りなく透明に近いブルー』の発表直後の福生市議会定例会において，議員から市長に対し，「ややもすると悪の巣になりがちなハウス対策」について質問がなされていた（新井2005: 777–778）。

このように，米軍ハウスおよびその住民たちと，地域社会との地形的および心理的分断により，米軍ハウスでの自由な文化的営為や自足的な生活が担保されていたのである。実際，『女性セブン』1976年9月1日号に掲載された「嗚呼！！われら花の〝福生族〟」という記事では，「福生の町なかでひろった，こぼれ話あれこれ集！」として，「ハウスは基地のそばにあるので，飛行機の騒音はものすごい。でも，ハウスの住人たちは，『公害だなんて思ったことも。気にしたことすらない』んだそうだ。スゴイ。」と，米軍ハウスの住民たちが横田基地の飛行機の騒音を意に介していない様子を伝えている。木本玲一は，こうした米軍ハウスの状況を，「福生にありながら地元住民や地域社会とのネットワークは弱く，しかし永遠にフェンスの内側の合衆国にはなり得ない，エアポケット的な空間」と表現している（木本2011: 149）。

2）地域経済からの独立性

上述の分断は，米軍ハウス経営の形態自体の，地域経済からの独立性によっても下支えされていた。そもそも米軍ハウス経営は，米軍人が相手であるがゆえに，行政にとっては固定資産税の増収以外にあまり利点はなかったという（福生市史編さん委員会1994: 482）。また，1970年代における日本人を相手とした米軍ハウスの経営は，地域経済とは異なる経営論理で成立していた。大手ハウス業者の一人は，雑誌記事で次のように語っている。

> 「まあ，正直言いまして，ハウスはどれもモトはとっくにとっているんですよ。20年前に建てたときは土地は坪（3・3平方メートル）2000円どまりだったから100坪の敷地で20万円だ。建物が80万円として合計100万円。当時からアメリカさんの家賃は3万円が相場でしたから，ふつうは3年もあれば投資を回収しておつりがきちまう。あとはまるもうけでしたから，日本人むけのいまの家賃を少しぐらい安くしても平気なんです。私なんか，礼金だっていらんぐらいですよ」（「長髪族にもてる米軍ハウス」『朝日ジャーナル』1974年5月24日：37）。

実際，別の米軍ハウス経営者は，日本人が米軍ハウスに住み始めた当初は敷金・礼金を取っていなかったという（「若者のニューアジト福生」『週刊プレイボーイ』1973年7月17日：49）。米軍ハウスの日本人の住民たちにとって，ハウス生活の魅力の一つとして言及される「家賃の安さ」は，こうした地域経済の論理とは異なる米軍ハウス経営から生じたものである。

3）アメリカへの意識／無意識

さらに，福生の米軍ハウスの住民たちにとっての「アメリカ」が必ずしも強い憧憬の対象ではなかっ

たことの社会条件を理解するためには，上記（1）・（2）のようなローカルな条件以外に，1960年代終わりから70年代における，「アメリカ」に対する社会意識（あるいは無意識）を考え合わせる必要がある。

加藤典洋は，安保闘争以降の高度経済成長下に起こった日米関係についての日本国民の心情の変化を，こう指摘している。「1951年，占領が終了した時には，『アメリカ』にたいする，占領が『まだ終わっていない』という感覚は国民大衆に広く浸透していた。しかし，1960年代に入り，いわゆる経済的な高度成長期にさしかかると，ぼく達の間には全く別のかたちで「アメリカ」がしのびこんできたように見える」（加藤［1985］2009: 63）。加藤によれば，1960年代から70年代前半，日本国民にとっての「アメリカ」は，もはや直接的な「占領者」ではなくなり，ごく日常的なものとなってしまうという。また，藤竹暁は，1960年代において日本人の生活水準の上昇の当然の帰結として，アメリカ的生活の仕方が生活の中に浸透し，1940年代後半から50年代とは異なり，日本人のアメリカに憧れ，恋する心がそれほど意識的かつ積極的ではなくなったことを指摘している（石川・藤竹・小野1981a）。こうした状況を，吉見俊哉は次のように要約している。「70年代以降の日本において，『アメリカ』はもはや他者として名指される存在ですらなくなっていった。この時点までに日本社会は，『アメリカ』を自己に取り込み，同時に『日本』自身を他者化していた」（吉見2007: 233）。

米軍ハウスの住民たちにとっての「アメリカ」が，必ずしも強い憧憬の対象ではなくなっていたことは，こうしたアメリカに対する同時代の社会意識から説明できる。さらに藤竹は，70年代になると，日本人はアメリカと同時代を生きるようになり，その結果，アメリカを（あくまで）情報源として意識するようになることを，『ポパイ』や『ホットドッグ・プレス』を例に挙げて論じている（石川・藤竹・小野1981b）。先述の天野喜孝が福生の米軍ハウス生活で獲得し，享受したのは，まさにアメリカのポップアートに関する情報であった。

7. 米軍ハウス文化の終焉

1）建て売り住宅の〝侵略〟

前章では，1970年代における米軍ハウス文化の展開を可能にした社会条件を検討してきた。1980年代になると，そうした条件は崩れ，米軍ハウス文化も終焉を迎える。老朽化された米軍ハウスは取り壊され，そこに建売り住宅が建てられていく。その状況は，すでに1974年の雑誌記事において，「耐用年限がきたのを取りこわし，あとに日本式の狭い建売り住宅を建てるのである。ハウス一軒分が，大体三戸から四戸の建売り住宅に化ける。一戸当たりの分譲価格は一二〇〇万円から一五〇〇万円になり，すでにじゅうぶんにモトをとっている持ち主に最後のご奉公をするわけだ」（「長髪族にもてる米軍ハウス」『朝日ジャーナル』1974年5月24日：39）と伝えられていた。また，前出の坂野正人は，1980年に，福生の米軍ハウス群に起こっていた変化を次のように観察していた。

> そもそも以前この辺は2階建て以上の家はほとんど見当たらなかったのである。平屋であるハウスの白い壁がずうっと並んでいたのだが，現在はそれこそ〝侵略〟という言葉がぴったりくるような感じに，建て売り住宅がハウスの家並みを分断しながら建てられて来ている。ハウス1軒分の敷地に，2階建て住宅を2軒建てるものだから，急にそのあたりがせせこましくなってしまう（坂野1980）。

1983年の雑誌記事も，かつての福生のハウスでは，「日本人の若者たちが中心となって，マリファナ・パーティの御開帳」であったが，「今は，その若者たちも福生から去った。福生市の開発計画に伴って，新興住宅や団地が建設され，ここはありふれた東京郊外のベッド・タウンに生まれ変わった」と書いている（「福生は基地の街か」『現代の眼』1983年3月号：101）。その後の1990年代の米軍ハウスの様子を活写しているのが，あびる義明の漫画『東京タイムマシン』（あびる1998）である。そこには，米軍ハウスを探しに福生を訪れた筆者が，「普通の建て売り住宅」と「米軍ハウス」とが「チャンポン」になっている状況を目にし，少々困惑する様子が描かれている（図1）。

2）地域経済の変容

1980年代以降，福生の地域社会および経済もやはり変容していく。すでに1973年の変動相場制移行に伴う円高により，福生は経済的に大きな打撃を受けていた。1978年の新聞記事は，「『米人はこのごろ電卓を持っているのよね。ピッピッピ，ポッ。オー，トゥーマッチ（高い）。みんなこれよ！』。花屋，洋服屋，生地商，みやげ店，いずれもがこうぼやく。『値段なんか聞かないし，おつりも取らなかった』米人が，最近は『一メートル一ドル以上の生地には見向きもしない』と，評判が悪くなった」（『朝日新聞（東京版）』1978年8月3日：20）と報じている。新井智一は，1980年代以降の福生の変容を次のように説明している。円高により，福生市内の基地前商店街は衰退し，70年代後半にはゴーストタウンのような状況であった。だが，1988年に東京都は国道16号線の拡幅工事完成に合わせ，基地前商店街をモデル商店街事業に選定し，その補助を受けて，街並みが整備されていく。またその頃から，「16号線沿いのボーダーシティ・福生。フェンス沿いのリトル・アメリカ。」や「福生　米軍基地のある国道16号線沿いで異国ムードあふれるショップをめぐろう」など，福生や基地前商店街の「基地の街」の雰囲気なるものを強調する雑誌記事が多く見られるようになり，「基地の街＝カッコイイ」というイメージが流通していく。さらに，東京都商工指導商業部も，「外国的な雰囲気」を前面に出すよう提案するなど，基地の街の「イメージ」が基地前商店街に戦略的に付与されていく[5)]。その結果，基地前商店街という場所が「商品化」され，再活性化が達成されるのである（新井2005）。

8.　結語

本稿において記述してきた1970年代の福生およびその周辺地域における米軍ハウス文化についての考察は次の通りである。

戦後，米軍基地の街となった福生において，農業経営の不振，および米軍のオフ・リミッツと町の浄化対策による業者の転業という，福生の地域社会-経済状況を背景として，米軍ハウス建築ブームが発生する。しかし在日米軍施設の再編により，横田基地の在留米軍人員は減少し，1970年代に米軍ハウスの空き家が増える。その空き家に日本人の若者たちが入居することによって形成されたのが，米軍ハウス文化であった。

その米軍ハウス文化は，自由な文化的営為，自足的な生活，そして住民たちにとっての「アメリカ」が，必ずしも強い憧憬の対象ではないことが，その特徴として指摘できる。そうした米軍基地文化の展開を可能にした社会条件は，米軍ハウス住民と地域社会との分断，および米軍ハウス経営の地域経済からの独立性，そしてアメリカへの意識／無意識に求めることができる。

以上の本稿の考察は，先行研究が扱い損ねてきた，1970年代の福生における米軍基地文化の様相を

図1 「普通の建て売り住宅」と「米軍ハウス」とが「チャンポン」になっている状況*1
*1 出典　あびる（1998）：132

明らかにするものである。また，米軍基地の街である福生という地域社会をフィールドとした，いわばローカルな水準において，対米意識に関わる文化的諸実践を記述するものである。こうした本稿の記述は，戦後日本社会における日米の文化的関係に関する社会学的理解に貢献するものである。

残された課題もある。本稿で検討した，米軍ハウス文化が形成，発展していたその一方で，1970年代の福生においては，米軍基地反対運動が盛んに行われていた[6]。この福生という地域社会における，米軍ハウス文化と米軍基地反対運動の「同居」という事態は，詳細に検討する必要があるだろう。また，1970年代前半には，埼玉県狭山市の米軍ジョンソン基地周辺の米軍ハウスに日本人のミュージシャンやアーティストが生活し，「狭山アメリカ村」と呼ばれるコミューンを形成していた[7]。この「狭山アメリカ村」と，本稿で扱った福生の米軍ハウス文化を比較する作業も試みられて然るべきである。これらの作業は別稿に譲りたい。

注

1) 本稿において，特に「福生町」とする場合は，1940年から1970年までの，行政区画としての福生町を指し，「福生市」とする場合は，1970年以降の行政区画としての福生市を指す。ただし，本稿が考察の対象とする米軍ハウス文化は福生町が福生市となる過渡期に展開しており，また隣接する瑞穂町や立川市にも広がっている。したがって，本稿において，福生町あるいは福生市を中心として，隣接する地域も含むかたちで考察する場合は，「福生」としている。

2) 松山薫による，関東地方における旧軍用飛行場跡地の土地利用変化の調査によれば，多摩飛行場は，終戦以降もそのまま現在に至るまで米軍用地として使用されている（松山1997）。

3) 小林優香は，福生における米兵相手の売買春に対する，基地側と行政側の政策や地域住民たちの具体像を詳細に明らかにしている（小林2018）。

4) 「福生45スタジオ」の様子は，大瀧，伊藤銀次とともにナイアガラ・トライアングルとして音楽活動を行ったミュージシャンの山下達郎もこのように証言している。「僕は常にスタジオで寝泊まりしてました。スタジオの隣に数人止まれる寝室があって，いつもそこで寝てました。朝までダベって，大瀧さんが母屋に帰って。でも，そこで大瀧さんと何かずっと喋ったりする人間は，僕があそこにいた時代には，僕と（伊藤）銀次以外ほとんど誰もいなかった。みんなでワーってやることはほとんどない。どんちゃん騒ぎとかはないの。銀次が福生から出て行って東京に移り住んだ後は，もう僕と大瀧さんと二人だけで。それで朝の7時とかまで，何喋ってたのやら…（笑）。」（『レコード・コレクターズ』2015年9月号：47）

5) 『商店界』1990年6月号では，基地依存から脱却し，基地を利用した方向を目指す福生武蔵野商店街の取り組みが取り上げられている。

6) 朝鮮戦争が勃発して横田基地が拡大され，爆撃機が離着陸するようになると，福生では騒音問題が発生するようになり，1963年12月にF-105Dが福岡県板付基地から移駐すると，反対運動が起こる（福生市史編さん委員会1994: 686）。そして1960年代後半から70年代にかけては，「関東計画」によって首都圏の米軍基地が横田基地に集約されることに対し，一層，基地反対運動が盛んになる時期であった。

7) 「狭山アメリカ村」を米軍基地文化の一形態として社会学的に考察したものとして，塚田（2017）がある。

文献

あびる義明，1998，『東京タイムマシン』第1巻，集英社.

青木深，2013，『めぐりあうものたちの群像：戦後日本の米軍基地と音楽1945–1958』大月書店.

荒居直人，2002，『ゴーゴー福生』クレイン.

新井智一，2005，「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる「場所の政治」」『地学雑誌』114(5)：767–790.

福生町，1965，『福生町の統計』.

福生町誌編集委員会，1960，『福生町誌』福生町役場.

福生市企画財政部企画調整課，2016，『福生市と横田基地』福生市.

福生市史編さん委員会，1993，『福生市史資料編　現代』福生市.

福生市史編さん委員会，1994，『福生市史　下巻』福生市.

林博史，2014，『暴力と差別としての米軍基地』かもがわ出版.

石川弘義・藤竹暁・小野耕世，1981a，『日本風俗じてん　アメリカンカルチャー②60's』三省堂.

石川弘義・藤竹暁・小野耕世，1981b，『日本風俗じてん　アメリカンカルチャー③70's』三省堂.

伊藤銀次，1992，『ロック解体新書』Bug News Network.

加藤典洋，［1985］2005，『アメリカの影』講談社文芸文庫.

木本玲一，2011，「米軍基地を介した地域社会のグローバル化／ローカル化」遠藤薫編『グローバリゼーションと都市変容』世界思想社.

小林優香，2018，「米軍基地と『性』―横田基地周辺地域を事例として―」『史海』第65号：39–53.

松山薫，1997，「関東地方における旧軍用飛行場跡地の土地利用変化」『地学雑誌』106(3)：332–355.

森正人，2018，『「親米」日本の誕生』角川選書.

村上龍，1976，『限りなく透明に近いブルー』講談社.

難波功士，2014,「基地文化という視座」難波功士編『叢書戦争が生み出す社会Ⅲ　米軍基地文化』新曜社.
難波功士編，2014,『叢書戦争が生み出す社会Ⅲ　米軍基地文化』新曜社.
小澤智子，2015,「東京都福生市・立川市周辺のアメリカ軍人の居住と『福生新聞』にみる地元の反応」「人の移動とアメリカ」研究プロジェクト編『エスニック・アメリカを問う』彩流社.
連野城太郎，1989,『GOTTA! 忌野清志郎』角川文庫.
坂野正人，1980,『トーキングアバウトフッサ』写真通信社.
東谷護，2005,『進駐軍クラブから歌謡曲へ』みすず書房.
塚田修一，2017,「1970年代の米軍基地文化に関する一考察―『狭山アメリカ村』を中心に―」『三田社会学』22号：99–110.
Vine, David., 2015, *BASE NATION How U.S. Military Bases Abroad Harm America and the World*.（＝西村金一監修，市中房江・露久保由美子・手嶋由美子訳『米軍基地がやってきたこと』原書房2016）.
山崎茂男編，1977,『ふっさっ子』第4集，武蔵書房.
吉見俊哉，2007,『親米と反米』岩波新書.